

UN Women セーフティーズ・グローバル・イニシアティブ
平成26年度 堺セーフティ・プログラム キックオフシンポジウム

「女性と女兒にとって安全安心なまち堺へ ～堺セーフティ・プログラムの取組～」

報告書

平成26年11月21日（金）

13：30～16：00

堺市中文化会館ホール

【プログラム】

時間	内容	登壇者 ※敬称略
13:00	開場～受付	
13:30	主催者挨拶 来賓挨拶 【内閣府挨拶】	市長 竹山 修身 堺市議会議長 大毛 十一郎さん 内閣府 男女共同参画局長 武川 恵子さん
13:50	【基調講演】 「堺セーフシティ・プログラムの取組～安全安心まちづくりの現状分析をおこなって～」 【大阪府警察報告】	岸本 幸臣さん（羽衣国際大学学長） 石川 嘉嗣さん（大阪府警察犯罪対策室）
14:20	体操（舞台転換）	
14:30	【パネルディスカッション】 「堺セーフシティ・プログラム～女性にとって・すべての人にとって安心安全なまち『堺』の作り方～」	コーディネーター 池上 清子さん（日本大学大学院総合社会情報研究科教授） パネリスト 萩原 なつ子さん（立教大学社会学部社会学科教授・21世紀社会デザイン研究科教授） 李 節子さん（長崎県立大学シーボルト校大学院 教授） 山口 典子さん（堺市女性団体協議会委員長） 竹山 修身（堺市長）
16:00	閉会	
16:10	懇談（楽屋にて）	登壇者の皆様、堺市、南大阪地域大学コンソーシアムによる懇談
16:30	終了	

【参加者数】 670 人

（１）開会

13：30 よりシンポジウムが始まる。会場の様子は以下のとおり。

	
入り口の風景	受付の様子
	
受付の様子	会場 10 分前
	
要約筆記されている様子	UN Women オープニング映像

（２）主催者挨拶・内閣府挨拶

開会にあたり、主催者を代表して竹山市長から挨拶、来賓として大毛市議会議長、内閣府の武川男女共同参画局長から祝辞があった。市長からは、セーフシティ・プログラムに参加する抱負が述べられた。大毛議長からは、堺市が UN WOMEN のセーフシティ・プログラムに世界で 2 番目に参加したことへのお祝いと、本取組への期待が述べられた。内閣府武川局長からは、男女共同社会の実現は、誰もが安心して暮らせる地域づくりを進める上で、必要不可欠であり、女性に対する暴力は大変な人権侵害であり、男女共同社会の実現の妨げとなるもの。政府でも、女性が活躍するための様々な施策を実施する。女性が安心して暮らせることは、女性が活躍する重大な基盤となる。政策パッケージでも、女性や女兒に対する性犯罪の根絶に向けて全力で取り組むものとしている。堺市が本プログラムの取組がよきモデルとして、日本全国に、世界に発信されることに期待すると述べられた。

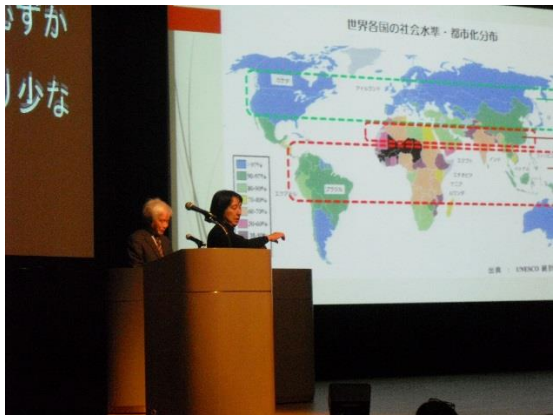
	
開会	竹山市長挨拶
	
堺市議会 大毛議長挨拶	内閣府武川局長挨拶

(3) 基調講演

12月に提出予定のスコーピング・スタディのサマリーを軸にした内容について、講演があった。セーフシティ・プログラムのめざすところ、なぜ堺で実施されるのか、堺こそふさわしい都市であること、現在、そのために進めている現状調査と分析について8つの視点からおこなっていること、5年後のめざすべき方向性等について、報告があった。

(4) 大阪府警察報告

大阪府における性犯罪の現状について、数字やグラフを示しながら報告があった。ひったくりの被害者の約9割が女性で、大阪府では平成12年に最多だったひったくりが、現在大幅に減少している。その成果は、各自治体や住民の取組によるところも大きい。ただ、現在でも大阪府はワースト1。強制わいせつ被害状況では、4年連続大阪府は認知件数が最も多い、神奈川県は3倍に近い数（本年10月末）。堺市は政令市の中では9番目。性犯罪は、暗数が多いため、実際はもっと多いのではないかと。大阪府下と堺市で被害時間について「すべての年齢」と「小学生以下」の場合を比較したグラフで示しながら、被害にあう時間帯が多少異なることなどが報告された。小学生以下は、下校～帰宅後に被害にあっている場合が多い。大阪府では捜査員を大幅に増員、被害の証拠の管理、被害者負担の軽減のための電話相談対応などの対策をしているが、届出被害は増加傾向にある。防犯ボランティアとの連携等多様な対策を進めているとの報告があった。

	
岸本学長 基調講演	石川管理官 大阪府警察報告

(5) 体操（舞台転換の時間を利用して）

舞台の配置転換の時間を利用して、その場で身体を動かすストレッチ体操を行った。和歌山大学大学院生の山口さんが指導を担当。

	
体操指導する山口さん	体操する会場のみなさん

(6) パネルディスカッション

池上：基調講演、大阪府警察からの報告を受け、議論を深めていきたい。国際的に女性への性暴力やジェンダーの問題があるのかについて、3つ--①国連の安全保障理事会の決議（2000年）ボスニア＝ヘルツェゴビナやルワンダの内戦状況のもとで民族浄化の名のもと兵士による大量レイプが起こる。こうした女性の被害を出さないために国連は何かできるかを考えたもの。②ミレニアム開発目標。世界189か国の政府が、生活の質を上げるための目標を8つ掲げる。そのうちの1つジェンダーの平等と女性の地位向上は必要項目として挙げられている（2000年）。③2015年秋には、女性に対する差別、暴力の根絶の文言が入る予定。これらは、人権をどう守っていくかという枠組みから出発していることを理解してほしい。女性や女儿への暴力に対する大きなうねりが世界で起こっている。

池上：[質問1]先進都市としての堺で何が重要か、自己紹介を兼ねて発言を。

萩原：今所属する大学院では、20世紀とは違った価値観で社会のしくみをつくっていく、基本は市民参加、男女共同参画によってどう社会をつくっていくかを考えている。豊島区は消滅可能性都市として23区で唯一選ばれた。市民は一気に団結して何とかしようとし始めている。豊島区は

WHO のセーフコミュニティの認証都市。どう安全安心なまちづくりにしていくかその方向性をつくり、在りたい姿に向かって取り組んでいる。女性や女兒が言葉を出すことで、見える化することができ、課題を認識できるようになる。また、「堺の在るべき姿」を見えるようにすることで、みんなでその目標に進んでいくことができるようになる。

李：本プログラムに取り組むことは、堺のため、世界のためになる。助産師として、研究者として、30 年間日頃感じていることがたくさんある。見過ごされている問題がたくさんある。先進国ならでは現実的な問題として解決できる何かを堺市でやってほしい。

山口：堺で最も古い女性団体の 5 代目の代表。今年で 66 年の歴史をもつ。これまでに行ってきたことがある。①コマーシャル：私作る人、僕食べる人への抗議、メディアにおける男女役割固定化の問題、ビールの CM で水着姿のコマーシャルへの抗議。日本の男性がパスポートで顔を隠し、妻が「エイズに気を付けて」のポスターへの抗議。②電車の車両内での暴力がきっかけにより女性専用車両の新設への活動。堺市長が本プログラムに参加したことに感謝。

市長：堺で生まれ堺で育った。堺は中世からセーフシティだった。環濠で、自治都市だったことを誇りに思わなくてはならない。男女共同参画宣言都市でもある。堺はすべての人にやさしい街をめざして、市民と協働して行っていく。「安全なまちづくり会議」を堺区だけでなく今後各区につくり、地域で安全なまちづくりを考えていく。青パトの配置、防犯カメラ、行政が市民活動の支援を行う。堺の中世の歴史に誇りを持つことからスタートしたい。

池上：[質問2]安全なまちづくりを進める上でどうすればいいか。

萩原：消滅可能性都市となったときに何が大事かという、F1 と言われる 10 代、20 代の女性が安全安心に暮らせるまちでないとだめ。そうした人がどんな街を望んでいるのか。そうした人の声を聴く場があったのかとの反省のもとに、どんなまちにするかは人まかせにしないで当事者意識をもつ、そのためには自分たちが抱えている課題を明らかにしていくことが大事であることから、「としま 100 人女子会」ができた。豊島区のイメージは池袋。安全安心のためには、公園をどうするか、子どもたちはどうするか、など考えていくとある部署だけで考えてはダメだと言うことに気づく。いろいろなところが連携していかなければいけない。そのためにはワンストップサービス（性暴力被害者支援）で受け止めていくことが必要というところで動き始めている。一方国の動きは、女性女兒の犯罪に対して 1 億円の予算化。ワンストップのセンターづくりに予算化が始まった。大阪も入っている。そのためには垣根を越えて連携することが大事で、行政内部の連携がその前に重要。豊島区の『としま 100 人女子会』では、自分事として取り組みが始まっている。堺市でも会話の場をいろいろなところで作っていく、そこで出た声を拾っていき対応していくことが大事。「女性や女兒のための暴力をなくしていく」という明確な課題に対して何ができるかを考える上でも、会話の場が大事。

池上：[質問3]「当事者性をもつ」という重要なキーワードがでてきた。もう少し具体的に。

萩原：例えば、公園を使う人と考えると、全員がそうだが、子どもを遊ばせたい人、子ども自身も当事者。その人たちが公園で遊ぼうとするとなかなか遊べない。ただ、たばこを吸ってる人、寝転んでいる人も公園を使っている当事者。そうした人たちが一緒に公園で遊ぶことができるためには、お互いがお互いの立場を理解しようとしないうちの平行線をたどってしまう。そのため、自分事として考えることが必要。他人事として考えているうちは、解決に対して参画しようとする意識は出てこない。自分事として考えない限り、意識の変革にならないし、啓発にもつながっていかない。そこが当事者性の一番のポイント。

池上：「当事者性」というところで、何か解決策があれば。

山口：先ほど警察の報告で、女性や女兒が被害にあう時間帯で放課後から午後 8 時頃とあった。自分は被害にあわないと思っている人が多いが、実際には 90 才でも被害にあう国。強制わいせつ、強姦、婦女暴行、DV、ちかん、セクシュアルハラスメント、ストーカーなどの犯罪がどのくらい私たちの身の回りで起こっているのか実態を知らないと、対策を考えることはできない。今、セーフシティ・プログラムでそれをやろうとしている。みんながそれを知って取り組んでいくことが大事。例えば青パトは東京にはない。

市長：当事者性は、行政の責任。当事者性をしっかりと市民に植え付けることが責任。例えば、自転車の前かごカバーをつけよう、そうすればひったくりにあわない、自転車には錠をつけよう、盗まれた自転車でまたひったくりが起こるという次の犯罪を生む。当事者性を行政が広報、啓発することによって犯罪を抑止することが大事。おせっかいのおっちゃんやおばちゃんにならないといけない。おせっかいなまちにして、子どもからお年寄りまで、当事者性をしっかりと体得するまちづくりをめざしたい。（拍手）

池上：質問 4 女性や女兒一人一人が安全に暮らせるまち、被害にあわないようにするためには、私たち一人一人が何をすべきなのか。

李：14 人に 1 人が性的強姦、3 人に 1 人が性暴力を受けている。性暴力は、嫌な言葉を聞かされる、嫌なものを見せられる、突然胸を触られる、それをすべて性暴力という。WHO の発表では、全世界の 70% の女性がぶたれるかレイプされるとある。この性暴力の定義を考えると、すべての人が性暴力にあっている。この大きな問題を、今まで問題にならなかったのはなぜか、という問題を考えることが重要。性的強姦は恥、本人が悪い、誰かに相談するところもない、他の暴力とは違う特徴がある。もし性的強姦にあったとすると、警察に行くのも怖い、親に言うとなんてことしたのと言われる、友だちに言うとなつて笑われる、となつて被害者が誰にも言わないでいると、次の被害者を生む。被害者が言っていける場所、言える風土・文化があれば、これほど性暴力は蔓延しないし、早い段階で加害者は罰せられるし、性暴力の温床となる文化はできていない。性暴力を受けた人が、これは犯罪だ、何とかしてほしいと言って、いつでも 24 時間駆け込める場所があれば、被害を恥と思わず、一緒に寄り添って考えてもらえる。今起きている被害者が声をあげ、社会がその人をケアする、そうしたシステムを一刻も早く作るべきだと考えている。（拍手）

池上：「視覚から、言葉から」を考えると性暴力はすべての人があっているという指摘は、本当にそれで、数限りなく性暴力は存在している。今、被害者が駆け込めるところがあることが重要だという指摘について、堺は今までどんな取り組みをしてきたのか。

李：堺の取組は、DV のパンフレットや警察などでがんばっている。ただ、24 時間体制ではなく、マンパワーが足りない。内閣府が進めているワンストップセンターは、性暴力被害を受けた人がそこに行けば、治療、立件、カウンセリング等をしてもらえ、全国に 14 箇所ある。世界の中では、20 万人に 1 人にワンストップセンターを作りなさいと言われている。堺市は 80 万人都市であり、早急に 24 時間体制で、そこに行くとき寄り添ってもらえる場所を作るべき。今全国で行われているのは、病院を中心に、治療、支援の免許を持った人の配置などがあるが、早急には難しいので、まずは、24 時間体制でそこに行くとき寄り添ってもらえる場所を作る。

池上：そうした場は堺市にはあるのか。

山口：堺市にはない。隣の松原市には、阪南病院に「SACHICO」というワンストップセンター、強姦の被害にあった女性が駆け込める病院がある。医者がいて、警察が来てくれ、1 か所で被害者

が助けてもらえるセンター。安倍総理が国会で、ワンストップセンターを全国に作ると答えていた。解散されたのでどうなるか分からないが。そこは、全国から被害者が来て病院も警察も大変な状況。堺市にも新しく大きな病院ができるので、何とかできないか。（拍手）警察も性被害に熱心に取り組んでおられるので、堺市だけではできないので是非連携してやってほしい。それをセーフシティ・プログラムの成果としてつくってほしい。性暴力をなくしていく大きな力は教育。幼稚園から家庭の中でどんな教育をしていくのか、どんな姿を親がみせているのか。強姦被害にあったら、警察に行く前に、まず病院へ行く。病院では、望まない妊娠を防ぎ性感染症にかからないために洗浄処置をしてもらい、精液等の証拠物件を警察がもっていってくれる。そうしたことを男の子も含め、被害にあったときどうするかについて教育を受けておく必要がある。

池上：ワンストップセンター、病院の話が出ていたが。

市長：この問題は議会でも必要性について議論されている。国や自治体が作っていき、それを支えるのは地域のNPOや団体の人。女性や女兒の問題は、弱い立場の人をどのように救済していくかの問題にいきつく。子どもへのDVは、国は48時間以内だが、堺は24時間以内に措置することを定めている。そのための職員の配置も行っている。性被害のことはまだだが、一つ一つやっているのが堺の状況。（拍手）

萩原：教育は重要で、セーフスクール認証もある。学校の中から教育を通して地域を作っていき、浸透していくことも重要。事前予防と何か起きたときの対応をどうするか、2つをしっかりと分けて、事前予防では被害にあわないためにどうすべきか、起きてしまったことをどうするかは危機管理の問題。危機管理は、①リスクマネジメントで起きないようにするために日頃から対応する、起きてしまった場合は②クライシスマネジメントで起きてしまった場合にどうするか。自分自身が分かっているか分かっていないのか、そこで重要なのが教育であり、啓発。そのために国が予算を立てているが足りない。そのために、堺から発信していくことがとても重要。

池上：堺は全国に先駆けてモデルになることが進みつつある。全国には、まだ気が付いていない都市がたくさんあるので、男女共同参画局長、国の予算どりを頑張ってもらいたい。応援しています。（拍手）

池上：会場への質問

会場A（女）：宿院近くの堺市の中心に住んでいる。5月雨の日にコソ泥が入ったがまだ犯人は捕まっていない。他にも起きておりコソ泥が多い。何とかしてほしい。

石川：警察が3人来ているようなので、証拠資料を集めて犯人逮捕に努めていると思う。

会場B（男）：中区からきた。団地に住んでいて、子どもが荒れている。中区には警察署がない。署名を集めて頑張っているが実現できていない。見守り隊や青パトもやっているが、是非、警察署を作ってほしい。（拍手）

市長：中区、西区は人口も多くエリアが広く、犯罪が多い。署名をたくさんもらっていて、大阪府にも要望を出している。地域の見守り活動をこれからも支援していきたい。（拍手）

会場C（男）：ジェンダーの問題は、支配と被支配の問題がある。ブラック企業などでも支配と被支配が起きている。こうしたことが起こらないためにも、リーダーをどう選んでいくかが重要で、今度選挙にも行きたい。市長もがんばってください。

池上：選挙に行くか行かないかは、地域レベルでも国政レベルでも、参加できる方法。是非、投票へ。

李：セクシャリティでは、一方が一方の性を支配してはいけない。それは犯罪。サイバー空間では、強い男が赤ちゃんのような弱い性をレイプし、そこに価値を見出し、被害を受けた人が喜んでい

るかのような映像がものすごく多く出てくる。これを絶対許してはいけない。デートDVは、男性は優位に立たなければいけない、女性は従わなければいけない、気に食わなければ殴ってもいい、といった刷り込まれた「支配」「被支配」の関係が暴力を生む。性暴力は、その結果女性だけが妊娠をするという、非常に大きな人生の節目にあう。毎年のように、高校生が、自宅で出産し、子どもを殺し、刑務所に行く。性行為に対しては、女性一人があまりにも結果責任を負う。子どもという次世代に及ぶという意味で、性暴力に対する「支配」「被支配」は絶対に許すことができない。お互いの性を尊重して思いやること、お互いの人生を大切にすること、お互いに責任ある行動をとること、非常にシンプルなこれらについて、性に目覚めた子どもたちに学校教育の中でやっていくべき。UN Womenでは、世界のモデルをつくることになる。加害者にならない、被害者にならない、対等な関係をつくることのできる思春期教育・性教育を、具体的に、条例を作るなどして、堺市ではしっかりとやっているということをすれば、少しでも前進するのでは。（拍手）

池上：事前予防と起きた後の対応という話があったが、教育は事前予防になり、女子も男子も女性も男性もお互いを尊重しあう人間関係を作れるような、そんな教育が必要なのではという話。

萩原：山梨県の高校でジェンダー教育の中で、男女の制服を交換し、1日交換した制服を着て、その時どんな気持ちになったのかを考える取組を行ったというニュースがあった。生徒から出てきたアイディアで全校の80%が参加。それもジェンダーを考える一つの方法かと、紹介。

池上：相手を尊重すると言葉で言っても、実際にその立場にならないと分からない。今、親を介護しているが、日本の道路は車いすが非常に動かしにくい。当事者意識というのは、当事者と同じような経験を積むことで、同じように気づくことの範囲が広がるかもしれない。

池上：[質問5]最後に一言。今後安心して住めるまち堺をつくる、とういことにどんな期待をもっているか、市長は、どんなことをしようという抱負を、お願いします。

萩原：課題を明確にするために、調査・分析をしっかりとする。それをみんなで共有する。自分たちはどういう堺になりたいのか。それが、日本は、世界は、というふうになっていく。一番重要なのは、一人一人の意識の変化と行動。日本NPOセンターの副代表理事の立場として、今の社会はいろいろなところがつながって、協働していかなければいい社会を作っていけない。そうした意味で連携、協働、病院、警察、ありとあらゆるところが手をつないでいかないと問題の解決にはつながっていかない。一人一人が自分のこととして考えて、自分にできることは何かを一人一人が発見していかない限り、誰かがやってくれるというのでは、安全安心は得られない。今日はまさにキックオフ。これから自分のこととして考えること、リスクセンスを身に付けることが大事。

李：30年間性暴力被害にあった人を医療の現場からその人の近いところでその人たちの涙を見てきた。どうしようもないことがたくさんある。その無力感を30年間考えてきた。苦しんでいるのに見ようとしなくて、なかったことにする、ふたをしてしまう、ことに苦しんできた。UN Womenはそうではない。総長は、この暴力を黙ってはいけない、がまんしてはいけない、全世界の取組にしようとして、このプロジェクトを立ち上げた。それにこの日本で、堺が手を挙げた。先ほどから感激している。女性団体を引っ張っている山口氏、市長、警察と一緒に、このような壇上で議論することはない。最後に堺市の取組を3点、①そこに行けば誰でも寄り添えるワンストップセンターのようなところを作る、②思春期からの性教育をする、③それらを担うことができる専門家を養成する。この3つがなければ具体的な成果は出ない。そのために協力したい。（拍手）

山口：基調講演の中にあったサイバー空間。スマホやパソコンなどインターネット上、光ファイバーを通じて、性犯罪が巧妙化している。私の小学生の子どもがリベンジポルノにまきこまれそうになった。大変驚いた。どこのだれか分からない、多分男性が、子どもに服を脱いだ写真を送れと言ってきた。スマホは暗証番号が分からないとみることができない。親が知らないところで、子どもたちはこうした犯罪に巻き込まれていくと言う恐ろしさを身をもって知った。普段、女性問題の活動を行っていても、「あなたは悪くない」と言った後、どうすればいいか分からない。李先生にすぐに相談した。スマホにたけて、ICTから逃げないで、どこから情報を得ているのかを知る。何が起きているか分からない中で、教育活動を拡げていくことが大事。サイバー空間のこうした話、全国で初めて。やっぱり、「もののほじまりみな唄」。(拍手) 強姦罪は、来年、親告罪ではなくなり、普通の犯罪になる予定。「食わせてやっている」もある意味暴力。自分を尊いものとして、被害を受けたとき、被害を受けたと堂々と言える、「あなたにオイこら」と言われる私ではない。ダメと言える女性の自尊感情、自信をもてるようになることが大切。唄はこれから世界に出ていく。「唄から世界へ」。暗い夜道を一人で歩ける社会でしょうか。小さい子どもが夜歩ける安全なまちでしょうか。これができて、初めて差別のない安全安心なまちになると思っている。

竹山：安全安心なまちづくり、女性と女兒をしっかりと守っていくまちづくり。そのために何をしていくか、これは、地方自治の基本。地域のことは地域で決めていく、自分たちのまちは自分たちで運営していく。これが一番大事。役を頼まれたとき、手を挙げて役をやるようなまちでなければだめ。これやってと頼まれたときは、是非引き受けてほしい。そして、孤立したらだめ。孤立せずに、向こう三軒両隣でアドバイスをしあう、サイバー空間に強くなるためにも勉強していく、そんなことが必要。もっと大事なのは振り込め詐欺。妻の携帯にもかかってくる。そうしたことを情報交換し、危ないときは隣の人に聞くとか、専門の人に電話するなどの手立てをしっかりとっておく。それは人と人との結びつき。これが安全安心の根本。是非、これからたくさん友だちを作ってたくさん相談してほしい。(拍手)

池上：登壇者の皆さんに盛大な拍手を。(拍手)

	
パネルディスカッションがスタート	コーディネーター池上教授



パネリスト萩原教授



パネリスト李教授



パネリスト山口委員長



パネリスト竹山市長



パネルディスカッションの様子



会場からの質問